

【論文】

## 認識の現象学とメレオロジー

齋藤 暢人

### 0. はじめに

フッサールの『論理学研究』第六研究は「認識の現象学」であり、認識作用の本質が総合であるとされ、その上で、カントによる感性と悟性の区別という認識能力の分析が再検討されている。

興味深いのは、認識に関する大小さまざまな問題が分析、記述されてゆくなかでメレオロジー的思考が見え隠れすることである。総合の類型はメレオロジーに従って整理される。また、悟性は感性に「基づけられた作用」として定義されるが、これは明らかにフッサール自身の第三研究におけるメレオロジー研究を下敷きにしている。第六研究の全編にわたって、形式的存在論としてのメレオロジーの認識論への応用の気配が感じられ、同研究を認識のメレオロジーと呼ぶことも不可能ではないかもしれないが、このことを十分に取り上げた先行研究は多くはない。

してみれば、フッサールの思想の前提となっているようにみえるメレオロジーの要素に光を当ててみることには幾許かの意義があるろう。とりわけ、フッサールが目指した最大の認識論的課題である理性批判についても、新しい観点から見直すことができるのではないか。

議論は次のように進む。はじめに、フッサールによる認識のメレオロジーとはなにかを明らかにし (1)、それに引き続く範疇的直観の説を認識能力のメレオロジーとしてとらえなおす (2)。様相がこうした諸議論を結びつける役割を果たしていることを、メレオロジーとの関連から明らかにし (3)、最

後に、現象学的理性批判について考察する（4）。

## 1. 認識のメレオロジー

### 1. 1. 総合としての認識

はじめに、第六研究における志向性の分析を概観しておく。先行する第五研究においては、作用の志向の本質が探究された。志向の本質とは志向性の必須の契機であり、それらは質料および性質とされた。第六研究においては、この志向の本質に加えて、志向 Intention（意味志向）／充実 Erfüllung（意味充実）という契機が導入される（6LU, §8）。作用は、その認識的価値により、表意的作用 *signifikativer Akt* か、それとも直観的作用 *intuitiver Akt* か、という分類が可能である。記号的作用は単なる志向であるが、直観的作用は志向が充実されている。認識の成立／不成立は、この志向と充実の区別によって説明されるので、充実は認識の不可欠の契機である。それゆえ作用には、基底にある志向の本質を包摂するような認識の本質がある。

認識的本質	志向の本質	質料
		性質
充実		

図1 認識の基本構造

充実は志向と対をなすが、もうひとつの重要な契機とも対をなしている。フッサールが想定している認識とは、典型的には知覚における同一化総合 *identifizierende Synthesis* あるいは同一化合致 *identifizierende Deckung* であって、時間的な過程である（6LU, §11）。だが認識では同一化がなされずに終わる場合もあり、そのときには充実の代わりに対立（背反）*Widerstreit, Streit* がおきている（*ibid.*）。対立は志向の失望（幻滅）*Enttäuschung* であり、充実はこれとも対になっているのである（*ibid.*）。

このように認識の現象学においては、認識は総合と定義される。また、作用は部分をもつ。このことは「総合」の語義からして自明と思われるかもし

れないが、現象学的所与としての意識体験がその部分に分析できるという主張は決して自明ではなく、十分な検討を必要とする。

## 1. 2. 総合の分類

認識は総合なのであるが、そのありかたは多様である。一方では全体的 total であるが、他方では部分的 partial でもあり、後者はさらにいくつかの下位ケースに分類される (6LU, § 12)。この区別がどのような意味をもつかみてゆこう。

### 1) 全体的総合

志向が充実される場合、両者は一致するが、そうでない場合、充実の欠如ではなく充実されない場合の両者は不一致である。これらはいずれも統一した体験を形成するという意味では総合であるが、前者は同一化であり、後者は差異化 (区別) である (6LU, § 11)。フッサールの例では、「A は赤い」と思ったが、A は、本当は緑色だった、という場合である。このとき志向は同一であって、同じ対象 A を志向している。しかし、緑の A が直観されることで、赤と緑が不一致を引き起こす。両者は離反し、赤い A は失望させられる。

この例からわかるように、全体的総合は、同一性と非同一性という、二つのケースしか区別しない。一致するか、それともしないのか。このことだけが問題となる総合である。

### 2) 部分的総合

これに対して、志向の部分的一致ないし対立も生じうる (6LU, § 12)。そもそも対立は、ある志向がそれを包括する志向の部分であるときにおこるのだが (6LU, § 11, 12)、対立のしかたにはいくつかのパターンがありうるのであり、フッサールはそれらを場合に分けて記述している。

極限的で純粋なケースとしては全体的な失望が生じうる。フッサールの記

述を踏襲しつつ述べれば、知覚  $T(a, b, c)$  と  $T(-a, b, c)$  において、 $a$  と  $-a$  が意識されている場合である。たとえば、緑と赤のみが意識されていて、緑の志向が赤の直観によって失望させられ、「これは緑ではない」となる場合である (6LU, §12)。

だが、 $T(a, b, c)$  と  $T(-a, b, c)$  が意識されていることもある。部分  $a$  と  $-a$  は対立するが、部分  $b$  などは合致する。このとき全体は (純粹ではなく) 混合した対立となる。

他方で、 $T(-a, b, c)$  が解体していて、 $T(a, b, c)$  と  $-a$  が意識されていることもある。このときも「これは緑ではない」という状況が例となりうるが、これは排除 *Ausscheidung* の関係と呼ばれる。フッサールの議論を補足しつつ要点をみておこう。いま「緑」を  $-a$  とする。字義どおりにはこれは「赤でないもの」だが、赤以外の任意の色という不定なものではなく、この場合、赤でなければ色を緑に限定しうる、という前提をおく。すると、この状況は、赤い「これ」、 $T(a, b, c)$  から、緑  $-a$  が排除されている、という状況である。

排除には純粹排除と混合排除があり、後者は契機が複合的な場合におこりうる。例は「これは緑の瓦屋根ではない」である。瓦屋根を  $b$  としよう。「緑の瓦屋根」はこれと  $-a$  の積  $-a \times b$  となるであろう。 $-a \times b$  は、 $a$  と  $-a$  において排除関係にあるが、 $b$  においてはそうではない。もちろん、 $a \times b$  と  $-a \times b$  とは、メレオロジーで考えると共通部分をもたず、分離している。

以上のように、対立にはさまざまなヴァリエーションがある。上記の対立のケース以外にも、さらに包含のケースがある。これもまた完全な一致ではないという意味で、対立の一種なのである。

包含が生じるのは、ある志向がそれを包括する志向によって充実されるときである。例としては、赤い瓦屋根の志向と赤の志向の関係が挙げられる。前者の志向は赤の志向に包含される。赤い瓦屋根は赤いから、赤い瓦屋根全体の直観は赤の直観に包摂されているのである。

このケースも多少記号を用いて整理するとわかりやすい。「赤の志向」を

a、「瓦屋根の志向」をbとすると、「赤い瓦屋根の志向」はこれらの積であり、 $a \times b$ などと書ける。ここで $a \times b < a$ はメレオロジーの定理である。ゆえに、「赤い瓦屋根の志向」 $a \times b$ は、たしかに「赤の志向」aの部分になっている。

フッサールは、部分的綜合の場合、作用のあいだで包含 Inklusion、交差 Kreuzung、排斥 Exklusion などが生じる、としている (6LU, §12)。上記の諸例からみて、綜合がメレオロジーの図式を利用して分析されていることは明らかであろう。

### 1. 3. 認識のメレオロジーと知覚の現象学

以上の詳しい記述をみると、フッサールの認識の現象学をより体系的に把握することが可能であり、またその必要性も感じられる。そのような試みは次のように図示できる内容へと帰着する。



図2 全体的綜合

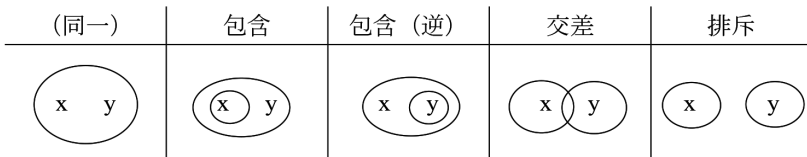


図3 部分的綜合

比較すると明らかなように、全体的綜合よりも部分的綜合のほうが詳細に対象を把握している。全体的綜合においては、同一性と差異性すなわち非同一性しか弁別されないが、それに対して、部分的綜合においては、差異性のなかで、さらに包含、交差、排斥などのヴァリエーションが弁別されるから

である（これらのいずれにおいても  $x=y$  ではない）。

総合がメレオロジーによって分析されるのは、それが知覚の本質をなしているからである。物体の知覚においては、それが見える部分と見えない部分をもつということは、ほぼアプリアリだと言える。全体と部分の構造は知覚にとって不可欠なのである。このような知覚論を背景とした認識論は、メレオロジーに基づく認識のモデル化であり、いわば認識のメレオロジーである。

こうしたフッサールの認識論からは次のことが帰結する。総合には成立／不成立の二つの可能性しかない、ということにはならない。総合にはそれを構成する部分がありうることになり、それゆえ、総合の成否はグラデーシオンをなしうる。ところで、グラデーシオンを許容するような意識作用は、一般に直観というべきものであろう。フッサールにおける認識とは総合であったから、認識は一般に直観ということになる。

だが、このように、その構造的特徴によって直観を定義することからはある重要なことが帰結する。直観されるものがいわゆる感性的なものとは限らないことになるのである（6LU, §12）。この帰結は、カント哲学を多少とも知る者の目には奇妙に映る。感性は直観の能力であり、感性的と直観的とは同義だったはずだからである。この帰結は第六研究における重要な主題である、いわゆる範疇的直観の説へと発展してゆく。総合を直観とする、という現象学特有の構えが、この独特な概念の導入へと道を開くのである。

#### 1. 4. 意識の否定的契機とメレオロジー

総合の基本的なモデルがメレオロジーであるという主張の根拠となりうるのは、次のような、失望の一般化についてのフッサールの注意である（6LU, §11）。

失望が生じるのは、志向が部分的であるときである。このとき、補足的部分への志向が充実されると失望が生じる。つまり、対立は全体を背景とした部分であるときにおこる。

フッサールは慎重に、部分をもたない単純な作用に触れている。これについては対立はおこらない。しかし、そのようなものは極限的なケースにすぎない。それゆえ、意識には全体と部分の構造があるということが前提となっている。

全体をある部分をもつものであるとしたとき、その部分以外のもの、残りが存在するということは自明ではない。それを主張することは、メレオロジーにおけるいわゆる補足性を主張することである。フッサールの分析に現れる対立を否定的契機とみなすならば、その所論から補足性を読み取ることができる。つまり、 $x$  が  $y$  の部分にならないときには、 $y$  から分離された  $x$  の残りの部分が存在する。

こうした論理的操作の形跡は、フッサールの分析の基礎にはメレオロジーがあるという推定の根拠のひとつとなる。

## 2. 認識能力のメレオロジー

以上のように、第六研究前半の認識の現象学には知覚論にもとづく認識のメレオロジーの側面があるが、この性格は第六研究の後続部分である「感性与悟性」における範疇的直観の理論においても維持されている。感性与悟性の区別という認識能力の区別はすなわち理性批判であるといえようが、するとフッサールはメレオロジーに基づいて理性批判を行っていたことになる。

### 2. 1. 範疇的直観の導入

直観といえば、(カント的) 哲学的常識によるかぎり感性的直観であるが、フッサールは周知のようにこれに加えて範疇的直観という新たなタイプの直観を導入したのであった。ここで注意したいのはその導入のしかたである。同一性の総合と同一性の作用の総合は異なる、という意識の事実が(再三) 挙げられる(6LU, §8)。この「発見」をもとに作用の分析が始まるのであるが、論拠は単純ではないので、以下の三点に分けてみてゆこう。

### 1) 存在論的理由：基づけられた作用

認識は総合であり、したがって直観であるが、非感性的なものを対象とした総合も可能である。そうである以上、感性的ではない直観もまた可能でなければならない。これは対象の存在論的な身分の違いに関する主張である。

もう少し詳しくみてみよう。連続的知覚は部分作用の融合だが、部分作用に基づけられてはいない。知覚は延長しており、断片をもつが、同じ対象を志向しているのである。端的な知覚は、感性的なもの、実在的なものを対象とする、と定義される (6LU, §47)。それに対して、同一性を意識するようになると、それはもはや感性的直観ではない。同一性は範疇的なもの、基づけられたものだからである。そこで、悟性的なものを対象とする作用は基づけられた作用 *fundierter Akt* とされる (*ibid.*)。

感性的直観とは端的な直観 *schlichter Akt* であり、それが部分作用からできていても総合を必要としない。対して、範疇的直観である基づけられた作用は統一のための総合を必要とする (*ibid.*)。

### 2) 様相的理由：自由

範疇的直観を導入するもうひとつの理由は、端的な作用が所与に拘束されているのに対して、範疇的な形式は自由である、という、両者の性格の差異である。フッサールは、実在的統一形式は規定されているが、範疇的統一形式は規定されておらず、自由である、とする (6LU, §62)。

この主張はフッサールに特徴的である。認識において志向は自由であるが、合致に至ると拘束される (6LU, §9)。

純粋な範疇法則をとらえる本来的な思考法則は非本来的な思考法則から区別される (6LU, §62, 63)。本来的思考が充実化の結果であり、直観であるのに対して、非本来的思考は単なる志向、意味であり、直観よりも広い (*ibid.*)。

感性的なものにはある種の強制があつて、知覚された内容を否認することや、それを別のものとみなすことなどはできないが、非感性的なものは任意



性がある。この対比は現実性と可能性の対照に似ており、様相に関する理由と言えよう。

### 3) 時間的理由：新しさ

基づけられた作用は本質的に新しい性格をもっている、とされるが、このことの典型は以下のように、メレオロジーからの例に求められている。

A が a を部分としてもつことの知覚、あるいは、a が A に内在することの知覚を例にとろう (6LU, §48)。このとき、まず A の全体的知覚があるが、他方で a の知覚が独自の作用として、潜在的に成立している。この同一の状況に基づいて、A が a をもつことと、a は A の部分であることは同じである、という同一性が認識される。だが、この同一性をとらえるのは基づけられた作用である。端的な知覚においては、全体と部分のあいだにある両義性（逆関係による記述可能性）はとらえられない。これは、範疇的对象である事態として、知的な作用によって把握されるのである。

かくして基づけられた作用は、本質的に新しい作用である。端的な知覚においては、部分が直接に融合して全体ができあがっているが、しかし全体の構造が意識されるときには、感性的全体には向かわない新しい作用が生じている。知覚は同一化の統一であるが、同一化作用の統一ではない。同一化作用は同一性を志向する基づけられた作用である。知覚と異なる基づけられた作用は、もはや実在的ではない何物かを対象とする。範疇的作用は、部分となる感性的作用に基づけられた全体であり、本質的に関係的である。外的関係についての知覚もまた、基づけられた作用である (ibid.)。

## 2. 2. 認識能力の再検討

フッサール自身の言葉によれば第六研究は論理的明証の現象学であった<sup>i</sup>。これは認識批判とみることができるであろうが、そうだとすると、のちの『イデーエン I』における「理性の現象学」への序説であったということになる<sup>ii</sup>。実際、そこではカント以来定説化した感性与悟性の区別が論じられ

ており、これは認識能力の構造分析である。なお、『論理学研究』は超越論的現象学の立場に未だ至らない時期の著作とされるが、カントの理性批判と主題を共有する以上、そこに超越論的な含意を読み取ることは可能である。では、カントとフッサールはどこが違うのか。カントによる認識能力の分析とは以下のようなものであった<sup>iii</sup>。

表1 カントの認識能力

認識能力	認識手段	主たる機能	能力の关系的属性
悟性	概念	綜合する	自発性
感性	直観	触発される	受容性

カントによれば、直観なき概念は空虚であり、概念なき直観は盲目である。つまり、認識が空虚か否かは、概念と直観の差異となって現れる。しかし、この空虚か否かの区別を、既述のように、フッサールは志向と充実の対比によって説明したのであった。

カントの場合は、認識能力それ自体が空虚でありうる。概念の本質は、その空虚さ、形式性にもとめることができるのである。ゆえに、フッサールが空虚さを概念から切断し、意味のありかたとしたとき、概念と直観の差異は、空虚か否かによって説明することはできなくなった。さもないければ、志向＝悟性、充実＝感性ということになってしまうであろう。もちろん、感性和悟性の区別は可能であるが、その差異は空虚か否かでは説明できない。直観もまた空虚でありうる。知覚は充実されているが、想像はそうではないであろう。また、知覚のなかにすら、表面の知覚のような充実した部分もあれば、裏面の知覚のような充実していない部分もある。

フッサールは、認識能力の手段としての概念には言及しない。悟性的対象の存在は認められるが、悟性をもつそれらの認識手段は範疇的直観なのであり、感性和悟性はいずれも直観となる。フッサールにとって、認識は綜合であり、それゆえその表象能力には精粗の程度差があることは先に指摘した

が、こうした濃淡の階梯は充実によって説明されるべきものであり、能力それ自体の差異ではないのである。

悟性を概念によって特徴づけることができないのと並行して、直観を触発によって説明することもできない。それゆえ現象の背後に物自体の存在を想定することもできない。

このように考えてくると、感性与悟性の差異は、その対象が悟性的対象であるかどうかによる、という見解に与したくなるであろう。つまり、与えられる対象の存在論的身分の差異が本質的であるかのように思われてくる<sup>iv</sup>。だが、範疇的直観の可能性が範疇的なものの存在による、とすることは論点先取なのではないか（カントの立場からも独断的であるという批判がありうる）。そうであるとすれば、ここでは感性与悟性の区別を可能とするような、非存在論的根拠が必要となってくる。

先に述べた、感性的作用の端的さ、拘束性と、範疇的作用の自由さ、任意性は、そうした非存在論的根拠となりうるものなのではないか。拘束された状態と自由な状態は現象において区別できるのであり、それによって感性的直観と範疇的直観が区別できるのである。この区別はカントにおける受容性と自発性の区別に相当するであろうが、カントにおけるそれは、あくまでも感性与悟性を区別するさまざまなメルクマールのひとつでしかなかったように思われるのに対して、フッサールの場合、この差異は認識能力の本質的区分となっているのではないか。

また、範疇的作用が新しいということもまた、非存在論的な根拠である。だが、これについては、受容性と自発性の差異に非常に近く、正確には区別が難しいかもしれない。新しい作用として感性的な所与の全体に付加される範疇的な構造は、実在の知的な分析の所産である。これは本来、自由で任意なものであり、それゆえ新しさと表裏一体であるとするれば、この基準は独立したものではない。

フッサールの場合、カントとは異なり、概念は考察の中心から外れ、直観が拡張される。また、総合が中心となり、触発は問題とされない。これは、

現象界の中で完結した構造を問う、ということである。それはあたかも、ある操作に関して閉じている代数的構造のようなものである。そして、このようにカントの理性批判の基準が整理されると、結局のところ残るのは、受容性と自発性の差異にあたるものだけとなる。しかし、もしそうであるとすれば、受容性と自発性の差異について、すなわち拘束と自由の差異について、さらに考察の余地があるのではないか。

## 2. 3. 基づけられた作用とメレオロジー

範疇的直観は基づけられた作用であると定義されたが、ここでの基づけは、第三研究とは無関係ではないものの異なる概念である、とされることがある。しかしながら以下のような議論が可能であり、それゆえ認識の現象学は、フッサールのメレオロジーの応用例であるとみることができる。

基づけの基本的な性質としては、次のような、第三研究において実質的に公理とされているものがある。ここで、「 $xFy$ 」は、 $x$ が $y$ に基づけられている、という述語である。

$$xFy \wedge x < z \wedge \neg y < z \rightarrow zFy$$

ファインによれば、 $xFy$ は、より簡明な論理的性質をもつ弱い基づけ「 $xWFy$ 」と以下のように相互定義可能である<sup>v</sup>。

$$xFy \leftrightarrow xWFy \wedge \neg y < x$$

$$xWFy \leftrightarrow xFy \vee y < x$$

また、 $xWFy$ は以下の公理をみたす前閉包 preclosure と関連づけることができ、 $xWFy \leftrightarrow y < fx$ によって相互の言い換えが可能である。

前閉包  $f$  の公理

$$x < fx$$

$$ffx < fx$$

$$x < y \text{ ならば } fx < fy$$

以上から、基づけ  $xFy$  は  $y < fx \wedge \neg y < x$  と概念  $f$  によって書ける。 $f$  による書き換えには非常なメリットがあり、これによって基づけを様相論理に対応させることができる。まず、 $x < y$  は  $\Box(Ex \rightarrow Ey)$ 、 $x < fy$  は  $\Box(Ey \rightarrow \Diamond Ex)$  とする。すると、先の相互定義可能性により、 $xFy$  は  $\Box(Ey \rightarrow \Diamond Ex) \wedge \neg \Box(Ey \rightarrow Ex)$  となる。このように関係を書き換えると、先の公理に相当する次の推論が得られるが、これは実際に妥当である。

$$\Box(Ey \rightarrow \Diamond Ex) \wedge \neg \Box(Ey \rightarrow Ex)$$

$$\Box(Ex \rightarrow Ez)$$

$$\neg \Box(Ey \rightarrow Ez)$$

---


$$\therefore \Box(Ey \rightarrow \Diamond Ez) \wedge \neg \Box(Ey \rightarrow Ez)$$

この推論はいわゆる存在論的依存性の形式化とみなすことができよう。このような議論の可能性は、フッサールの基づけ概念の用法が単なる比喻ではないことを示している。

この議論の哲学的内容について注意しておこう。 $x$  は  $y$  に基づけられている、 $x$  は  $y$  による補足を必要とする、ということは、 $x$  が全体で、 $y$  が部分ということである。これは、端的な作用としての感性的直観と、基づけられた作用としての範疇的直観との関係に具体的にあてはめることができる。フッサールのみるところ、感性的直観に範疇的形式が付加されることによって全体としての新しい意識作用ができるが、より正確には、この場合の全体とは、位相的には閉包になっているのであり、ここで表面化する順序関係に

よって意識の階層的構造がとらえられている。これは、感性的基底をなす実在をこえたより広い可能性の地平への移行がおこることを意味している。

### 3. 様相

前節で浮上してきた自由の概念の重要性は、第六研究の行論を再検討することによりいっそう明らかとなるように思われる。自由が様相の一種である可能性と関連することは、ほとんど直ちに明らかであろう。それゆえ、第六研究における認識のメレオロジーは様相概念に関する議論によってさらに補強されるはずである。

#### 3. 1. 両立可能性と明証

第六研究における様相研究はこれまで不当に注目されなかった分野である。第一章から第三章までの認識のメレオロジーに引き続いて、第四章で両立可能性が論じられているのだが、これが様相としての可能性の研究であることは明らかである。さらに、これに引き続く第五章は明証の研究であり、真理概念の現象学的分析が提示されている。しかし、明証には様相概念としての側面があり、したがって、これらの一連の議論は、全体として様相概念の現象学的研究とみることができる。

##### 1) 様相の現象学的分析

様相が認識の現象学において考慮されなければならない理由は、総合における合致や対立が、諸契機の両立可能性／両立不可能性という構造を伴うからである。そして、両立可能性からいわゆる可能性を定義することができる。ある契機が可能的であるとは、それがそれ自体と両立可能であるということとして定義できるのである (6LU, § 31)。

また、現象学におけるものの本質は、その必然性ではなく、可能性である。知覚と想像は連続的であり、可能的なものとは想像可能なものである。そして、ものの本質とは、その可能性のことである (6LU, § 30)。

## 2) 基本概念

この興味深い独特の理論を少し整理してみよう。参考になるのは、ルイス、ラングフォードの様相論理研究を発展させたオスカー・ベッカーの研究である<sup>vi</sup>。それに基づけば、様相概念は次のように整理される。

まず、 $p$  と  $q$  の両立可能性  $p \circ q$  は原始概念であるが、これは  $\diamond(p \wedge q)$  ということとして理解できる。また、両立可能性の否定が両立不可能性であり、たとえば  $p \bullet q$  のように記号化できる。先に述べた、両立可能性による可能性の定義とは、 $\diamond p \leftrightarrow p \circ p$  ということである。

さて、これらの概念に関して、フッサールは次のような「公理」を示している (6LU, § 34)。

$$\neg(p \bullet q) \leftrightarrow p \circ q \quad (\text{二重否定})$$

$$p \bullet q \vee p \circ q \quad (\text{排中律})$$

また、次のような定理を導いている (6LU, § 35)。

$$\neg(p \circ q) \leftrightarrow p \bullet q$$

$$(p \bullet q) \bullet (p \circ q) \quad (\text{両立可能と両立不可能は両立不可能})$$

フッサール自身は様相論理の体系的展開を意図しておらず、技術的にみるべき点は多くはないが、たとえば以下のようなことは直ちに明らかであろう。

$$\diamond p \leftrightarrow (p \circ q \vee p \circ \neg q)$$

これは排中律に似ているが、異なる主張である。これを変形することで様相

論理とメレオロジーの関連が明らかになるのであるが、この点についてはのちに触れる。

両立可能性の研究が様相概念の研究にほかならないことは明らかであるが、しかしそうであるとする、可能性がどのような概念と関連するのかということが明らかにされねばならない。具体的には必然性などである。両立可能性にもまたそうした関連の深い概念があるはずであるが、それは何であろうか。

両立可能性にとって、可能性に対する必然性に相当するのは厳密含意である。そもそも現代的な様相論理の出発点は、質料的含意とは異なる形相的含意としての厳密含意の研究であった。このことを念頭においてフッサールの議論をふりかえると、両立可能性に続いて明証 Evidenz を論じていることが注目になる。この明証を厳密含意とみることができるようと思われるのである。

フッサールによれば、知覚を特徴づける性格である明証とは、それ自体が与えられている、ということである (6LU, §37)。これは、 $p$  でないことは与えられえない、と言い換えることができる。

ところで、通常、必然性は厳密含意によって次のように定義される。

$$\Box p \leftrightarrow \neg p \Rightarrow p$$

厳密含意  $p \Rightarrow q$  とはもちろん、両立可能性の双対である  $\neg(p \circ \neg q)$ 、すなわち  $\Box(p \rightarrow q)$  のことである。

だが、必然性は明らかに次のようにも定義できる。

$$\Box p \leftrightarrow \neg p \Rightarrow \perp$$


これは  $p$  の否定がありえないということであり、その直観的な内容はフッサールの明証の定義に近い。 $p$  それ自体が与えられているということは、 $p$



の否定が排除されるということとしてよいであろう。

これまで登場した様相概念の相互関係を整理すると次のようになる。

表2 様相概念

明証的	両立不可能
必然	不可能
	
両立可能	(非明証的)
可能	(非必然)

非必然性、非必然の概念はほとんど言及されていないが、これを補足して得られる四概念がいわゆる対当の関係にあることは明らかである。

それゆえ必然性は、最終的には両立可能性の概念を用いて記述できる。つまり、pの否定は真理と両立可能でない、と述べることができる。それゆえ、明証は最終的には原始概念としての可能性によって理解できるのである。

では、可能性は本質であるということの含意は何であろうか。ものの本質は、そのものに必然的に備わる属性であると解釈されることがあるかもしれないが、フッサールが理解する本質はそのようなものではない。

可能性の概念は全方位に開けた平面をイメージさせるが、本質の概念は厳選された局所的領域を連想させる。しかし、後者はむしろ必然性のイメージであり、本質＝必然性という前提があればこそ、本質がこのように表象されることになる。よく考えてみれば、通常の物体はそもそも偶然的な存在なのであり、ほとんど必然的な性質はもちえない。しかし、だからといってものに本質がないことにはならない。ものの本質はその可能性において開示されるのである。

かくして、両立可能性および明証に関する議論は、様相概念に関する現象学的考察とみることができる。すると、一連の考察は、それがおかれている

位置からみて、認識のメレオロジーと認識能力のメレオロジーを接合する役割を果たしていることになる。

だが、その内容的な関連はどうであろうか。様相概念の議論がこれまでの二つの主題を媒介する可能性を、文献的事実以外の理由によって説明することはできるであろうか。鍵となるのは、様相概念とメレオロジーの関係である。様相概念がここで両主題を媒介しうるのは、まさにこの理由による。

### 3. 2. 様相とメレオロジー

以下では、様相をメレオロジーに対応させられる、ということをいくつかの根拠によって示す。

まず、先に示した定理は以下と同値である。

$$\diamond p \leftrightarrow (p \Rightarrow q \rightarrow p \circ q)$$

つまり、可能な事象に関しては、厳密含意から両立可能性への大小対当が成り立つ。さらに、必然的な事象に関しては補足性が成立している。

$$\Box p \wedge \Box q \wedge \Box r \rightarrow ((p \Rightarrow q \rightarrow p \circ r) \leftrightarrow (q \Rightarrow r))$$

ここから、命題で表現された事象の集合のなかには、条件つきながらもメレオロジーをもちこめることがわかる。両立可能性と明証はメレオロジー的な代数的構造によって理解することができるのである。フッサールは、両立可能性・不可能性は、何らかの全体があることを前提する、という (6LU, § 31, 33)。ここから、様相概念がメレオロジー的に表象されていることがわかる。

メレオトポロジーと高階様相論理の関係について補足しておこう。メレオトポロジーにおける内的部分関係  $D_{xy}$  は  $x \Rightarrow \Box y$  によって、メレオロジーにおける部分関係  $x < y$  は  $x \Rightarrow y$  によって写像できる。すると、以下のメレ

オトポロジーの公理は、続く様相論理の文に翻訳できる。

メレオトポロジー

$$Dxy \rightarrow x < y$$

$$x < y \wedge Dyz \wedge z < w \rightarrow x < w$$

$$Dxy \wedge Dxz \rightarrow Dx(y \times z)$$

$$Dxy \rightarrow D\sim y \sim x$$

$$Dxy \rightarrow \exists z (Dxz \wedge Dzy)$$

高階様相論理

$$x \Rightarrow \Box y \rightarrow x \Rightarrow y$$

$$x \Rightarrow y \wedge y \Rightarrow \Box z \wedge z \Rightarrow w \rightarrow x \Rightarrow \Box w$$

$$x \Rightarrow \Box y \wedge x \Rightarrow \Box z \rightarrow x \Rightarrow \Box (y \wedge z)$$

$$x \Rightarrow \Box y \rightarrow \neg y \Rightarrow \Box \neg x$$

$$x \Rightarrow \Box y \rightarrow \exists z (x \Rightarrow \Box z \wedge z \Rightarrow \Box y)$$

最後についてだけコメントしておく。 $x \Rightarrow \Box y$ を仮定する。様相論理より  $\Box y \leftrightarrow \Box \Box y$ であるから、 $x \Rightarrow \Box \Box y$ 。他方で  $\Box y \Rightarrow \Box y$ 。ゆえに  $x \Rightarrow \Box \Box y \wedge \Box y \Rightarrow \Box y$ より、なりたつ。

### 3. 3. 認識における自由

先に述べたように、現象学派においては本質が可能性として理解されていたのであった。このことと基づけられた作用あるいは範疇的直観の特徴である自由との関係について考えてみよう。

フッサールは、知覚の可能性と不可能性が、存在の可能性と不可能性、非両立性に対応している、とする (6LU, § 62)。また、範疇的直観の可能性の条件は、その対象の可能性の条件であって、分析的法則によって規定されている、とし (ibid.)、形相的に非両立ならば、経験的にも非両立である、と

いう（6LU, §64）。

こうしたところから、範疇的直観の特徴である自由を、様相概念として探求された可能性としてとらえなおすことが可能であることは明らかであるが、この概念的な関連にはさらに展開の余地があるようにも思われる。先に述べたように、範疇的直観が新しい全体であるということは、様相の観点でとらえなおしてみれば、可能性の開示として理解することができるであろう。範疇的直観においてより自由に対象をとらえるときに、われわれはさまざまな可能性の洞察を通じて本質に近づくのである。

### 3. 4. もうひとつの可能性としての想像

ところで、本稿では考慮外としてきた主題として、可能性には感性的な可能性、想像もある。フッサールはときに知覚と想像の平行性を主張し、それを根拠に想像の重要性を主張する。想像において感性的なものの本質が現れるのである（6LU, §10, 29, 36）。

想像という意識作用それ自体の特徴に注目すべき点があるかもしれないが、これまでの文脈を踏まえるならば、想像には範疇的直観と共通する可能性への意識という側面があるように思われる。これらは混同されるべきではないが、しかし、現実に基づきながらもその多様な可能性を探ることにより、本質が開示されるということは、現象学が明らかにした意識の根本的特性なのではなからうか。

## 4. 現象学的理性批判

現象学研究の通説によれば、フッサール現象学における理性批判の十全な展開は『イデーエン I』からはじまる。つまり、理性批判は超越論的現象学においてはじめて本格的に可能となる。

だが、現象学における「超越論的」とはどういうことであろうか。これは明らかにカントに由来する概念であるが、そこでは批判哲学の理論的出発点としての超越論的観念論を意味していた。つまり、空間・時間の観念論によ

る現象と物自体の区別という認識のコペルニクス的転回のことであった<sup>vii</sup>。ここから認識の有限性が帰結するが、このことと感性と悟性の区分とはほぼ同値であるように思われる。そうであるとすれば、結局、認識能力を感性と悟性に区分する批判を超越論的と言うことができる。

これまでの議論を振り返ると、フッサール現象学においては、現象における与えられ方の違い、拘束と自由の差異から感性と悟性の区別が可能であることが帰結したのであった。この区別が単なる心理学的事実ではなく、意識の本質によるというより強い主張をするためには、現象学的還元によるノエマの発見が必要であるが、結果的には、意識の構造としてのノエシスにはノエマが反映されているので、超越論的現象学以前の形相的現象学における意識分析の所産であっても、これを超越論的に解釈することは可能である。したがって、『論理学研究』における分析は、公式には超越論的現象学の成果ではないものの、そのための不可欠の要素であった、とはいえる。

そうであるとする、認識のメレオロジーとして把握できる『論理学研究』の成果は、超越論的現象学以前のものでありながらも、その含意を超越論的な立場から再評価することができることになる。そもそも理性批判という課題が抽象度の高いものであり、具体的な材料を用いなければ展開が困難である。意識分析におけるメレオロジーはまさにそうした材料の役割を担ってきたのではないか。知覚はメレオロジー的語彙によって記述できる。すなわち、ものの部分が射映されるだけでも、それらの総合によって全体としての対象が知覚されている。この総合から出発して、感性と悟性の違いを解明する理性批判を展開する。『論理学研究』第六研究をそう要約できるとすれば、ここではより一般的な総合のモデルに基づいた新しい認識論が試みられていたことになるであろう。

フッサール現象学はメレオロジーの語彙を見落とすと理解不能となる。このような解釈を一貫してとったのはソコロフスキーである<sup>viii</sup>。他方で、そのような解釈に消極的なのはローマーである<sup>ix</sup>。本稿の考察は、結論としてはソコロフスキーの解釈を支持する。フッサールの現象学的記述はメレオロ

ジーの単なる応用編ではないにせよ、知覚の基本構造であるメレオロジーに多くを負っているのであり、その意義は見落とされるべきではない。

## 5. おわりに

これまで、第六研究の議論のなかから「認識のメレオロジー」と呼べるものを抽出し、その意義を考察してきた。最後に気になる問題をひとつ指摘しておこう。本稿の議論は、様相をメレオロジーとみなすことができる、ということに基づいている。しかし逆に、様相を原初的な概念としてメレオロジーを理解することもできるかもしれない。そのときには、知覚の基本構造よりも一般的・抽象的な、様相概念が理性批判の根拠となるはずである。果たして様相の現象学は可能であろうか。ベッカーらの研究をみれば、それは魅力的なプログラムに映る。しかしそのとき編み出される思索の成果はすでに、直観に依拠する現象学の枠を超えて、概念を自在に振るう形而上学となっているようにも予感される。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 23K00095 「メレオロジーの成立と展開に関する思想的な研究：フッサールとホワイトヘッド」の助成を受けたものである。

## 〔注〕

- <sup>i</sup> 序文をみよ。
- <sup>ii</sup> 『イデーエン I』における明証論などは明らかに関連する主題である。
- <sup>iii</sup> カント『純粹理性批判』「超越論的感性論」緒言 I、「超越論的論理学 緒言 I 論理学一般について」をみよ。
- <sup>iv</sup> 実際、フッサールはそのように開き直っている (6LU, § 45)。
- <sup>v</sup> ファインの論考に関しては齋藤 (2022) をみよ。
- <sup>vi</sup> ベッカーの研究に関連する事項は先に齋藤 (2021) で論じた。
- <sup>vii</sup> カント『純粹理性批判』「純粹理性の二律背反」第六節、「超越論的心理学の第四誤謬推理に対する批判」における超越論的觀念論に関する議論をみよ。
- <sup>viii</sup> Sokolowski (1977, 2003)

ix Lohmar (1998: pp.166-8, cf. pp.203-5)

文 献

[非邦語]

Husserl, E., 1984, *Logische Untersuchungen II, Husserliana XIX1-2*, Den Haag: Martinus Nijhoff (略号 LU)

Lohmar, D., 1998, *Erfahrung und kategoriales Denken*, Dordrecht: Kluwer

Sokolowski, R., 1977, 'The Logic of Parts and Wholes in Husserl's Investigations', in J. N. Mohanty (ed.), *Readings on Edmund Husserl's Logical Investigations*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 94-111

—, 2003, 'Husserl's Sixth Logical Investigation' in D. O. Dahlstrom (ed.), *Husserl's Logical Investigations*, Dordrecht: Kluwer, 109-122

[邦語]

齋藤, 暢人, 2021, 「高階様相論理におけるメレオトポロジー」『中央学院大学人間・自然論叢』51, 51-69

—, 2022, 「基づけの諸類型」『中央学院大学人間・自然論叢』53, 57-74

## Phenomenology of Knowledge and Mereology

SAITO Nobuto

### ABSTRACT

The Sixth Investigation of Husserl's Logical Investigations is the "Phenomenology of Knowledge", which proves that the essence of the cognitive act is synthesis, and reconsiders Kant's analysis of the cognitive faculty, which distinguishes between sensibility and understanding.

What is interesting is that mereological thinking appears again and again as various epistemological problems are analyzed. The types of synthesis are mereologically organized. Understanding is also defined as an "act founded" on sensibility, which clearly derives from Husserl's own mereological research in The Third Investigation. Throughout The Sixth Investigation, there are hints of the application of mereology as a formal ontology to epistemology, and it may not be impossible to call this study a mereology of knowledge, but there are not many previous studies that have fully addressed this point.

Therefore, it may be of some value to shed light on the mereological elements that seem to be the premise of Husserl's thought. In particular, it should be possible to reconsider Husserl's critique of reason, the greatest epistemological challenge he aimed for, from a new perspective.

The discussion will proceed as follows: First, we will clarify Husserl's mereology of knowledge (1), and then we will reinterpret his subsequent theory of categorical intuition as a mereology of the faculty of knowledge (2). We will clarify in relation to mereology which role modality plays in various discussions (3), and finally consider the phenomenological critique of reason (4).